

2. 「芋づる式」による 先行研究調査



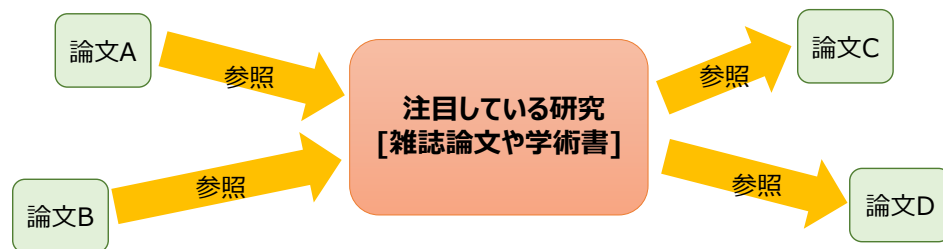
この章では、先行研究調査のアプローチのうちの1つ、「芋づる式」について詳しくみていきます。

芽づる式：“連なり”としての研究

研究は独立しては存在しないもの

これまでの研究の積み重ねがあって、新しい研究が生まれる

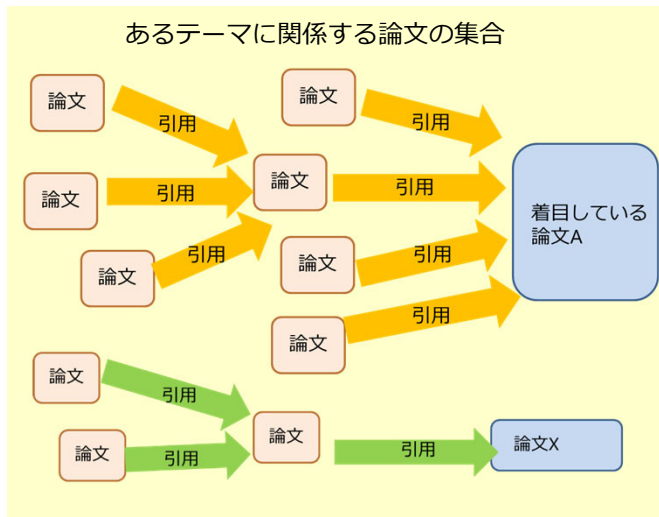
参照した先行研究は、**注や参考文献リスト**として明示するのがルール



12

この図のように、注目している研究があるとして、その研究は他の論文の内容を参照したうえで行われています。そしてこの論文もまた参照されていきます。このように研究とは独立して存在するものではなく、連なりとして存在しています。雑誌論文や学術書に、参考文献リストというものがついているのを見たことがあると思います。他の文献を参照した場合には、参考文献リストとして明示する、というのが研究の世界のルールになっています。

芋づる式：強みとその限界



強み：

無駄無く、過去の関連研究へ遡ることができる

限界：

①文献リストに挙げられていない関連研究を見逃してしまう

②着目した文献より後に発表された論文は別に探索する必要がある

このルールを踏まえて、注目している文献の参考文献リストから関連論文を遡っていく、というのが芋づる式の基本的な調査方法です。

これには、研究の流れをたどりやすいというメリットがあります。この図のようにどんどん関連する過去の研究へ遡っていけますね。データベース検索では、どうしてもテーマと関係ない論文も混ざってきてしまうので、「芋づる式」は無駄のない調査方法であるといえます。

デメリットとしては、この方法だけに頼ると、参照関係に無い、他の関連文献を見逃す恐れがあることが挙げられます。

そして当然ですが、過去にしか遡ることができないので、自分が参照している論文より後に発表された論文については別途調査が必要です。

研究初期段階における芋づる式の活用法

新しい文献からたどる

基本的に、新しい文献はそれまでの研究を踏まえている

専門的なテーマの論文からではなく、基本文献からたどる

そのテーマを大きく俯瞰して研究史を整理したような基本文献からたどり始めるほうが漏れが少ない

専門的なテーマの論文の文献リストは、その論文で踏まえるべき文献にあらかじめ絞り込まれている = 限られた範囲でしか芋づるをたどれない

どのような文献であっても、参考文献リストに掲載する文献の選別には、著者・編者の問題意識や評価が入ってきます。
1つの文献からの芋づる式調査ではどうしても漏れが生じるので、複数の文献を併せて活用するようにしましょう。



14

研究初期段階において、すなわち、研究史を把握していく、という段階においては、この2つが芋づる式活用時の基本ルールとなるでしょう。

1つ目は、「新しい文献を起点にする」です。

基本的には、新しい文献はそれまでの研究成果を踏まえているはずです。どの文献を起点にするか迷ったときは、より新しい文献から辿りはじめると良いでしょう。

2つ目は、「専門的なテーマの論文ではなく、次のスライド以降で紹介するような基本文献を起点とする」です。

専門的なテーマの論文の参考文献リストは、その論文で踏まえるべき細かいテーマの文献にあらかじめ絞り込まれていますので、限られた範囲でしか芋づるをたどれないことが多いです。

そのテーマを大きく俯瞰して研究史を整理したような基本文献からたどるほうが、先行研究調査として漏れが少なくなるでしょう。

研究初期段階で起点とする基本文献

参考図書（事典・辞書・ハンドブック・便覧など）

各項目の解説中の参考文献⇒そのテーマの基本文献の可能性が高い
参考図書の中でも、専門家コミュニティで編集されているもの（学会名で編集されている、各項目ごとに専門家が分担執筆している 等）がオススメ

概説書・入門書

その分野の代表的な概説書・入門書に挙げられている参考文献
初学者向けの文献リストが用意されているものも



とくに初めてそのテーマの先行研究調査を行うときに、芋づるの起点とするのにお勧めなのが、このスライドに示すような文献です。

まず1つ目が事典類です。

事典類の各項目の終わりに、参考文献が示してある場合があります。それらは、そのテーマの基本文献である可能性が高いです。

事典類といってもさまざまなものがありますが、専門家コミュニティで編集されている事典類があれば、解説内容も参考文献も、より信頼度が高いものと言えるでしょう。

専門家コミュニティで編集されているものとは、たとえば、学会名で編集されているものや、多くの専門家が編集に参加していてテーマ毎に分担して執筆しているものなどです。

総合図書館では、A棟2階に参考図書コーナーがあります。最近は電子で読めるものもあります。

次に、概説書・入門書等の学術書です。

教科書も含めて、その分野の代表的な概説書・入門書に挙げられている参考文献は、基本文献である可能性が高いです。

親切に、初学者向けの文献リスト・読書案内を用意してくれているようなものもあります。ぜひ有効に活用していきましょう。

総合図書館では、概説書や入門書はA棟3階・4階の学習用図書エリアに置いてあ

ります。また、新書コーナーの新書も入門書といえます。タイトルに〇〇学概説、とか、〇〇入門、などと書かれていれば、これがその分野をこれから学ぼうとしている人向けの本なのだ、と思ってください。

研究初期段階で起点とする基本文献

専門書

専門書の序章などで、研究史の整理がされていれば起点として有効

レビュー論文

そのテーマに関する文献を総覧・評価⇒多くの文献への起点となる

統一的な名称はないが、例えば「レビュー」「総説」「課題と展望」「現状と展望」「回顧と展望」といった論題が付けられている

雑誌によっては、定期的にレビュー論文が掲載されるものもある

16

次に、専門書とレビュー論文について紹介します。

専門書は本文の内容が難しく少し取っ付きにくいかもしれませんが、序章などで研究史の整理がされていることが多くあります。研究史の整理で挙げられている文献を起点とすると、重要文献を拾っていくことができるでしょう。

総合図書館では、専門書はA棟3階・4階の学習用図書のエリアと、書庫棟及びA棟5階の研究用図書のエリアにあります。

次に、レビュー論文です。

これも、あるテーマに関する研究史を整理するもので、多くの文献情報を得ることができます。

決まった論題が付いている訳ではないのですが、例えば、「レビュー」「総説」「課題と展望」「現状と展望」「回顧と展望」といった名称がつけられています。学問分野ごとに学術雑誌が出版されていますが、雑誌の中には、定期的にレビュー論文を掲載するようなものもあります。

とはいえ、どの文献が起点とするのにふさわしい基本文献であるかを見極めるのは、初学者には難しい問題です。

自分でも候補となる文献を考えてみた上で、よりふさわしい文献が無いか、先生にアドバイスをもらうのが良いでしょう。

初学者の段階を過ぎて、ある程度研究を進めてからは、着目した論文を起点に、自分なりに取捨選択や工夫を行いながら芋づるをたどっていくことになります。